白金薮

十一月

平成２４年11月発行　第21号

白金馨月例句会案内

・十一月28日(水)銀座句会(明石町区民舘…銀座築地明石町吟行五句)。
・十二月二十一日(金)12：00～15：00アビスタ(第三学習室)兼題：ちゃんちゃんこ、極月
・一月十八日(金)12：00～15：00アビスタ第三学習室兼題：新年一般　15：19編集会議&新年会
・二月十五日(金)12：00～15：00アビスタ第一和室兼題：寒明け、鰹(さより)

兼題の参考句（十二月二十一日分（ちゃんちゃんこ、極月）

泣く知恵は天からのものちゃんちゃんこ　塚田愁星
贅沢は敵と育ちぬちゃんちゃんこ　土屋秀穂
長生きの秘けつは薄着のちゃんちゃんこ　古田吉乗
極月やかたむけすつる枡のちり　飯田蛇笏
極月の三日月寒し葱畑　大谷句仏
極月のたましひ抱いて病み昏れむ　石原八束

月例句会報（12／11／16　5名欠4名）

マルチーズ抱いて小走り初時雨　飯田孝三

ルオー描く道化の横顔十一月
尼僧の青空説法お茶の花
踏切に大綿はらふ波郷の忌
お茶の花垣根弟の幼ナ顔　増田陽一

はや来たる白鳥白き虹となり
複数の死がすれ違ふ秋桜
われ寝入りつつ落葉は続きをり
茶の花の白続きたる闇の中
手賀沼に鷺は動かず初時雨　増田悦子

蝶になる子蟻になる子やハロウィン
鵯さわぐと見れば赤き実花水木
初時雨大根の葉に蕪の葉に
茶の花もありしと思ふ母の庭
住吉の反橋の反り初時雨　光成高志

剪られたる茶の花垣の裾に花
葱の葉の青くなりたる初時雨
盛上りそしてなだるる萩の花
芭蕉忌や六十年のバレリーナ

トンネルの出口の先の照紅葉
茶の花の蕊の睫毛を人形に
乗換へて我孫子の駅の初時雨
住む人の移り替はりて後の月
茶畑の花はみえねど羽音せり

茶の花や磨きぬかれて寺厠
鯖雲へ一直線に救急車
杖の身となりて一歩を初時雨
猿山の猿驚かす初時雨
茶の花や精進料理を尼寺に

光　みち

初時雨湖北古江の茫々と
茶の花のなだるるところ相模湾
かうと声残しぬ雁の去りゆくを
星住むは天の穴倉賢治の忌
栗名月傾きをりぬ筑波山

余命なる言葉出てくる日向ぼこ
厩橋歩いて渡る初時雨
蔵前の蛇屋のへびは冬眠中
茶の花を素直に見れば色がある
叔母を訪う新利根川の初時雨

青木啓泰

吉羽多美子

烏瓜柿と併せて展示場へ
初時雨友は八十余歳で伊奈へ行く
落葉焚けやきについでかえであり
門の外堀まで北側お茶の花
雀等は柿よりお米を食べたがり

小山陽也

嘉悦圭三

選句結果（数は入選数）

3 マルチーズ抱いて小走り初時雨　孝三
3 茶の花の蕊の睫毛を人形に　みち
3 踏切に大綿はらふ波郷の忌　孝三
3 蝶になる子蟻になる子やハロウィン　悦子
2 はや来たる白鳥白き虹となり　陽一
2 門の外堀まで北側お茶の花　陽也
2 鯖雲へ一直線に救急車　多美子
2 ルオー描く道化の横顔十一月　孝三
2 われ寝入りつつ落葉は続きをり　陽一
1 お茶の花垣根弟の幼ナ顔　孝三
1 鵯さわぐと見れば赤き実花水木　悦子
1 落葉焚けやきについでかえであり　陽也
1 芭蕉忌や六十年のバレリーナ　高志
1 星住むは天の穴倉賢治の忌　羊三
1 茶の花や精進料理を尼寺に　多美子
1 初時雨大根の葉に蕪の葉に　悦子
1 厩橋歩いて渡る初時雨　啓泰
1 乗換へて我孫子の駅の初時雨　みち
1 複数の死がすれ違ふ秋桜　陽一
1 杖の身となりて一歩を初時雨　多美子
1 剪られたる茶の花垣の裾に花　高志
1 余命なる言葉出てくる日向ぼこ　啓泰
1 住吉の反橋の反り初時雨　高志
1 茶の花や磨きぬかれて寺厠　多美子
1 蔵前の蛇屋の〈びは冬眠中　啓泰
1 雀等は柿よりお米を食べたがり　陽也
1 茶の花のなだるるところ相模湾　羊三
初時雨湖北古江の茫々と　〃
トンネルの出口の先の照紅葉　みち
叔母を訪う新利根川の初時雨　啓泰
尼僧の青空説法お茶の花　孝三
烏瓜柿と併せて展示場へ　陽也
葱の葉の青くなりたる初時雨　高志
猿山の猿驚かす初時雨　多美子
茶の花を素直に見れば色がある　啓泰
茶の花の白続きたる闇の中　陽一
初時雨友は八十余歳で伊奈〈行く　陽也
住む人の変りてゐたる後の月　みち
栗名月傾きをりぬ筑波山　羊三
盛上りそしてなだるる萩の花　高志
かうと声残しぬ雁の去りゆくを　羊三
茶畑の花はみえねど羽音せり　みち
手賀沼に鷺は動かず初時雨　陽一

一句鑑賞

飯田孝三

はや来たる白鳥白き虹となり　陽一

虹を見ると、誰もがその美しさに、思わず感嘆の声を

あげる。年寄も子供も、男女を問わず。そしてそれぞれ、そのはかなさを惜しむ。

渡鳥がやってくるのは、晩秋から初冬、小鳥たちは比較的早く、白鳥など大型の鳥は、主に冬に入ってからだ。新潟の瓢湖が飛来地として知られるが、最近は、首都圏付近にも飛来し、日頃、目にすることができる。つい先日、河原で鶸を見たばかりなのに、もう、白鳥がやってきた。その飛来を目撃し、思いがけず大空に懸かる虹を仰いだ瞬間にも似た感覚を覚えたのである。座五の断定が感激の深さを伝える。「海くれて鴨のこゑほのかに白し」(芭蕉)を思った。

門の外堀まで北側お茶の花　　陽也

一読、皇居東御苑内を思った。大手門二の門石垣から大手門に至る道沿いの確か北側に茶垣が連なっていた。苑内を参観したのは、夏だったので、茶の花は見られなかったが、掲句はこれを嘱目。茶は常緑、葉は長寿の薬効。千代に八千代に、むべ皇居の御苑に相応しい。皇居ならぬとも、「外堀」を巡らすのだから城郭の内。簡明に叙し情景が鮮明である。

剪られたる茶の花垣の裾に花　　高志

茶の産地以外では、茶は、大抵、屋敷の外垣や公園の生垣に植えられる。よって、定季に刈り込まれ、花木のように花が咲き揃うことは稀だ。(産地の茶畑ではどうなのかな)。花も実も垣表には散見されるだけ。枝葉の伸び難い剪定を免れ、割と花を咲かせる。そんな昔の故郷風景を想起させられた。末「花」に、垣裾に咲く茶の花を愛しむ目ざしを感じる。

茶の花の蕊の睫毛を人形に　　みち

茶の花は白色、五弁、その中心に多数の蕊がある。芳香を放ち、俯きかげんに咲く。金色の蕊が頗る印象的。なるほど、“目がぱっちりと色白で〜”、西洋人形そっくりだ。「蕊の睫毛を」の断定が巧まず手練。金の蕊が忽ち詩の境(昇華)する。仮に、例えば「蕊を睫毛に〇〇人形」では説明を出ない。末「に」がさり気なく働く、つくづく感興を深める。

蝶になる子蟻になる子ハロウィン　　悦子

ハロウィンは、万愚節(十一月一日)の前夜祭。日本では米国のカボチャ提灯で知られるが、ルーツは古代ケルト人の民族行事にあるらしい。

世は、グローバリゼイションの渦中、経済も、文化も。幼稚園や小学校では、その日、賑やかに仮面劇や仮装パレードなどをやる。そのワンカット。蟻は古今東西切ての働き手、黙々と地に働く。一方、蝶は虫類、人類が垂涎の舞の名妓いや名手、優美華麗な舞台の女王である。取

り合わせがかけ離れて面白い。児童劇にはどんな寓意が籠められているのかな。そうそう、ルナールは言っていた、蝶「二つの恋文が、花の番地を捜している。」、蟻「一匹、一匹、3という数字に似ている。／いるわいるわ！／3333333333333333……ああ、きりがない。」

（出句一覧掲載順）

光成高志

杖の身となりて一歩を初時雨　　多美子

晩秋から初冬にかけて通り雨がさあっと降る。これが初時雨である。**初時雨これより心定まりぬ**（虚子）のような句は、初時雨の情緒をよく捉えていると思う。掲句も初時雨の季感を自分の身に引きつけて、杖に頼って歩く身になった私、さあ、一歩を踏み出さんという決意の句。決してわびしさを感じない。わが身を韜晦した明るさが初時雨によってかもし出されていると思う。

われ寝入りつつ落葉（らくえふ）は続きをり　　陽一

こういう小説的興趣をもつ句は、芭蕉の連句においては、非常に好まれたらしい。しかし、芭蕉はこれを甘味と呼んで誡めている。現代俳句はこういう想像力を掻きたてる句が多いようです。私は、書かれたままの十七音をそのまま受け取り、自由に想像力を働かせ得る大きな空間を愛し、楽しんでおります。掲句では、もののあはれの認識はこういう時に得られると思ったり、また、漂う虚無感のような情趣を感じます。

踏切に大綿はらふ波郷の忌　　孝三

「綿虫やそこは屍の出でゆく門」「綿虫や安静時間緩やかに」（波郷）などの句を下敷きにして、踏切と大綿の取合せにて波郷を追悼する句である。綿虫の生態からして、「はらふ」の措辞は、蟣蠓にぴったりの表現であって、大綿には違和感がある。「**大綿は手にとりやすしとれば死す**」（多佳子）の句があるとおり、非常に小さい虫であり、物に当るとそのまま付着する。指で触るとその圧力で潰れ死んでしまう。踏切に綿虫が飛ぶだけでも波郷の忌に相応しいと思う。

叔母を訪う新利根川の初時雨　　啓泰

啓泰さんがこういう穏やかな句を作られる。叔母さんが新利根川に面した平野にお住まいなのであろう。新利根町、東町、桜川村があって霞ケ浦に至る。近江ならば、石山寺、瀬田川、義仲寺、琵琶湖となって初時雨の歌枕が多い所。芭蕉ならで、啓泰さんは、おさおさ近江に劣るまいものを、と頭をよぎって、当地を入れた初時雨の句を作られた。喝采。

ハガキ句短見　（ハガキ句報第二十一報）

焼諸の熱き釣銭渡さるる　飯田孝三　敏子

焼諸を買って、焼諸なら何のことはない、釣銭が熱かった。身辺の瞬時、些細に感じ、普遍、真実にうたれる。「流行不易」。一語一辞が巧まず、的確にはたらく。人々の営みの場があり、顔が見え、声が聞こえる。温く、明るく、ほのぼのと心が和み、熱いものが底にかよう。「臍」は、「釣銭」だが、さりげない「渡さるる」の終辞が、又、いい。こころ触れ合い、諧謔が滲む。

更に、調べのよろしさに気づく。Ya Ki I Mo No A Tu Ki Tu Ri Se N Wa Ta Sa Ru Ru。上五中七、イ母音の繰り返しは、心に入み、座五ア、ウ音の連復が、和んで、軽やかにほぐす。

お渡りや馬が糞するおん祭　高志

「お渡り」は、諏訪湖の御神渡りだろう。未見だが、祭の神事に馬が一役かう。凛冽の寒気のなか、蹄の音が弾む。玉の糞かこぼれる。「糞」の読みは、「まり」だろう。上五下五、母子音のリズムを繋ぎ、音いろ滑らかに、めでたさを跳ね上げる。O Wa Ta Ri Ya U Ma Ga Ma Ri Su Ru O N Ma Tu Ri。馬の足どりが目の当たりだ。それとも、「ふん」の方が重厚で実景に即し、「ふん〜」、「おん〜」と踏韻が、神馬の踏んばりを見せ、面白いか。

「木曽のなあ木曽の炭馬並び糞る」(兜太)に、祭のめで

ハガキ句二十一報（H. 18・12／26）

一茶の背兜太が洗ふ大年湯　孝三
木々灯す雁字絡めに十二月　〃　妙子
しぐるゝやスーツケースに傷あまた　高志
脚振ってバイバイ鸚鵡十二月　〃　敏子
お渡りや馬が糞するおん祭　〃
笹鳴きやお百度石の楷書彫
焼諸の熱き釣銭渡さるる

金子兜太さんが真栄寺にて例年通り講演をされるのを聴いた。八七歳であるが、「雑煮食う暦年齢虚ろなり」という句の通り、「私は今七十歳である」と仰る。一流性と一般性を持つ文芸が俳句である。蛙と柿と雪の話という中身は、芭蕉、子規、草田男の人口に膾炙した句の話。孝三さんの冒頭の句は、一茶好きの兜太さんの面目躍如たる句「梅咲いて庭中に青鮫が来ている」に響いていると感じました。

たさが加わる。

笹鳴きやお百度石の楷書彫　　敏子

笹鳴きの未熟と楷書の正格の対照が面白い。楷書の刻字は今に石面に残る。笹鳴きが、幾世の、心せく願掛けの足どりに重なる。切字「や」のはたらきが確かである。鶯の初音につれ、願いは叶えられただろうか。ときに、しんみり、不思議な安らぎがあり、俳諧がこぼれる。

脚振ってバイバイ鸚鵡十二月　　高志

「バイバイ」は和洋共通、別れの手のしぐさだ。鸚鵡が、習性の、特徴的な脚の振るまいでそれを演ずる。「十二月」の取合わせが、つき過ぎ、底割れのようで、さにあらず、ペーソスが漂い、面白い。

しぐるるやスーツケースに傷あまた　　妙子

スーツケースにひとの年輪を託したか。でも、切ない。しぐれの照り降りはつき過ぎ、情を薄めやしないか。「や」が浮く。「に」が説明臭い。「の」だろうか。他に、ほろと俳味のこぼれる、季語の取合わせがないだろうか。

ハガキ句21報短見をお送りします。年末年始の喧騒にまみれ、遅くなり、面目なし。ご免なさい。拙句のお褒め謝々。新年句会のご案内をいただき、有り難うございます。ぜひ加えてください。題詠ですか。当季雑詠でしょうか。当日を楽しみにしています。

高志さんの「お渡り」は、ぼくの知見の限りでの鑑賞です。去年は、久方振りの神のお出ましだったとか。その光景だろうか。暖冬の例年は、いわば神招きの祭(神事)だけやるのだろうか。たとえ、余所の祭事であっても、めでたさは変わらない。(奈良のおん祭です)

同22報重ねていただきました。有り難うございます。なお、同報の拙句は、「〜上野ゆ浅草ゆ」でした。むろん、芭蕉句を下敷きにしています。葉書の書きぶりがわるく、ミスプリを誘いました。

ぼくの住む下町に、年々、二三の音色の違う、除夜の鐘が聞こえてきます。寛永寺、浅草寺などからです。尤も、カミさんは、寛永寺や入谷の寺々の鐘だといいますが、ぼくは、そう思い込んでいます。上野も、浅草も、空間、四、五キロばかり、町のざわめきをたやすくこえる筈。浅草からだって、川面をわたるだけ、直ぐです。新年の句は難しい。ふつと口をついた、思いつきですが、「年迎ふ」は、「〜移る」、「〜替はる」より、町のざわめき、人々の暮らしが伝わる気がしました。(左の句の作者弁。)

今年も、どうぞよろしく願いあげます。ご夫妻の、益々のご健吟をお祈りします。草々。(H.19・1・11)

(年迎ふ鐘や上野ゆ浅草ゆ　　孝三)

お便り広場（到着順、敬称略）

白金葭第十月号拝受いたしました。充実振りすごいですね。どんどん私の手の届かない所へ飛翔して行く感じです。皆様の句、文章を眺めるだけで充分満足しています。設計にいた三人の友人が夫々絵画展に出品、見に行きました。夫々が見事な絵を描いていました。私は二十七日神田の古本市の初日に参加、大分仕入れて来ましたが、さてと思案投首です。元気でいます。皆様の益々のご活躍を祈ります。

（H．24．11．1小山陽也）

前略“白金葭”十月号お送り下さりありがとうございました。今月も素晴しい句を拝見し勉強させて頂きました。山田先生の会盛況だったことでしょう。お役目お疲れさまでした。ずい分寒くなりました。お互いに体調に気を付けて頑張りましょう。かしこ

（H.24.11.2廣本幸恵）

駄句で申し訳ありません。俳句囲碁とも縁のない生活をしています。我家の柿二本、珍しくも甘い実となりました。雀、尾長が来たり、人に差し上げたりです。3.11人工地震説の人と会ったり、まあいろいろとありますが、元気でいます。大分寒くなりました。会費同封致します。古代は16日分、28日分間に合うように夫々送ります。28日学士会館での会があり欠席させてください。下手な句が五句できホットしたところです。

（11．12小山陽也）

十二日俳句をポストに入れ、帰宅したら光成さんからの28日の手紙が我家の新設したポストに入っていました。明石町区民館のすぐそばにN建設の明石町分室があります。そこの三階が私の第二の職場でした。明石町区民館の一階はかつては築地の紹介がありましたが今はなくなりました。聖路加病院の一階には名画が何点か飾られています。二階には昔の礼拝堂があります。出入り自由でした。時間がありましたら是非どうぞ。築地の通り一本有楽町よりのバスが通る路に名菓「チトゼ」があります。ゴルバチョフ夫人が来店した店です。築地駅から聖路加へ行く途中、右側に五階建てだかの建物「シャレテます」は戸田の設計施工です。戸田のPCの建物も日特のうらの道を少し先に行った左側にあります。勉強会で半年位区民館を使用しました。またいずれ。

（H．24．11．13小山陽也）

十一月例会の当日は、世話になりました。たいへん楽しい一日でした。頂いた貴重な藻塩は、愚妻が旅行から帰ったら、早速堪能します。調理台拭きは重宝させていただいています。（以上お礼）

高志さんの「芭蕉のかるみ以後」、佳境に入り、益々快調と拝します。「我孫子日記」の各句には、毎号感服しています。俳句評論欄、森本流子さんの「吾かく戦えり」を毎号とくと拝読しています。戦時は知っていても、戦場を知らぬ昭和一桁は、唯々、襟を正す思いです。俳号「流子」は、昭和の歴史と激烈な戦場体験を負って重い。

お便り広場欄、清水俶子さんの作品四句の繊細な感覚と磨かれた措辞に感心しました。

（H. 24. 11. 21飯田孝三）

受贈誌（十一月号）

立山の峰をかすめて鳥渡る　（薊98号）　森下流子
こきりこのささら回して踊りゐる（〃）　〃
こきりこの踊りに刻を忘れゐし（〃）　〃
獣園に人といふ檻十二月　（彩107号）　平野ひろし
煤逃げの老人ばかり動物園（〃）　〃
罅割田罅に田螺の五つ六つ　（〃）　平山三郎
空蝉を伝ひ雨滴のしたたれる（〃）　篠崎用平
スカイツリー立つ横町のかき氷（飛行雲64号）駿河岳水
雪吊の傘に高層ビルを入れ（〃）　古平　隆
天の川並ぶテントの寝落ちたり（あすか488）山尾かづひろ
かにかくに坂多き町鰯雲（俳枕93）　熊谷彰子
わが頭たたく西瓜に似たる音　（雷魚92号）亀田虎童子
全天の星を映して種茄子　（〃）　増田陽一

俳句評論纂

＊薊薊98号に吾かく戦へり（その七）森下流子が載った。この稿にて完結する。かの大和の沈没する戦いが語られている。流子さんは、駆逐艦乗組員として戦陣の中に居られた。昭和二十年四月七日のこと。流子さんは降り注ぐ弾雨の中で必死に戦闘記録を取っていたが、爆風に飛ばされた以外、かすり傷一つ負わず、九死に一生を得て生還することができた。終戦後、無事故郷の土を踏むことが出来たが、子供の頃から徹底した軍事教育を受けていた為、無条件降伏という形で日本が敗戦したことに流子さんはどうしても納得がいかなかった。その時まで培ってきた祖国に献身するという精神が根底から覆され、今後何を信じて生きていけばいいのか、暗澹たる思いであった。何に付けてもすべてに虚無的になってしまった。そういう心の状態の時に流子さんを助けてくれたのが、「俳句」であった。戦争で受けた心の傷は生涯持ち続けるであろうが、日を追うごとに少しずつ癒されたのは事実である。俳句に心の平安を得ることが出来た。俳句を心の拠り所の一つとして今も生かされている。

靖国のさくらとならず米寿吾れ　流子

（流子さんは戦後S．25年に俳句をはじめられ10年後中断、25年のブランク後、S．六十年に再開、天狼にはH．2年に入会、二年にして会友となられて、誓子逝去後、築港創刊と共に同人として参加、H．十五年に薊を創刊主宰として現在に至る。H．九年に第一句集「塗師蔵」を電話後送付頂いた。「貴方には差し上げる」というお声であった。H．21年3月18日に本誌創刊祝電話をいただき薊を頂いた。今も俳誌交流を続けている。しかしながら、薊は百号でもって終刊することになったとあります。流子さんは今年91歳になられるはずだ。誓子先生は92歳で亡くなられた。山田圓子さんは94歳で天狼俳句を続けておられる。どうかお元気にて、流子俳句をお続けくださるよう願い上げます。）

＊歌人の河野裕子が亡くなった。繊細な女性で一時精神不安定になったが見事立ち直って、先年亡くなったと、孝三さんが話された。孝三さんは河野裕子の短歌が好きであられる。何年も前から、そのことを私に裕子短歌と共に言われていた。私は馬耳東風までいかないけれども、聞き流していた。裕子はコスモス、昼顔、それに猫が好きであったとか。夫で歌人の永田和宏さん（65）が、エッセエイ「歌に私は泣くだらう」（新潮社）で、乳がんの宣告に始まる、波乱の10年の様子を初めて明らかにした。この記事を読んで私も哀悼の意を表します。孝三さんの口から発せられた追悼句を左に書きます。

コスモスの風に隣の猫を抱き　孝三

（平成二十二年八月十二日。河野裕子死去。六十四歳）

手紙俳句の鑑賞　光成高志

干大根日の色風の色となる　廣本貢一

干大根の干加減を日の色風の色と見取った句です。さて、日の色は、どういう色でしょうか。大根を切った直後の白さから、日に曝されて、やや色づいてきた切干の薄黄色と思われます。風の色とは、風にも当り、風の色となったということでしょう。風の色が難しいですね。秋は白秋といって風の色は白です。色なき風も秋風です。切干が、冬日と冬の風にさらされている様相を日の色風の色と表現されたようです。ここは、難しい色での描写を避け、形や触覚でずばり表現されたら如何でしょうか。左に例句をあげます。

切干大根ちりちりちぢむ九十九里　大野林火

切干の網に張り付く固さかな　光成高志

落葉舞ふ風の形のなすままに　廣本貢一

秩父に行ったとき、川の上を斜になって落葉が渡るのを見ました。一枚二枚にあらずして落葉が風の気流となってその形を見せているのでした。旋風のような風では、ぐ

るぐる落葉が舞うのでしょう。落葉が風の形のなすままにと、わが身を落葉に託して、わが身を放下した様ともとれます。落葉風という季語がありますので、「落葉風風の形のなすままに」としてみると、舞ふという擬人化した落葉のありようを客観的に描写したことになります。そういうありようを落葉風とみて省略をきかし、もう一歩先を詠まれたらよろしいかと思われます。落葉風の季語では、「**落葉風残照梢をさまよひて**」(根本豪夫)と云う句を見つけました。

妻の書の晴れの展示や文化の日　　**廣本貢一**

文化の日に妻の書が展示されている。精進した書が展示される。晴れの展示とあるから、金賞などの賞に入ったのを見て晴れ晴れしく、天晴れと心に言っているのかもしれません。季語を文化祭とすると、より身近な生活が垣間見えるので、これでもいいと思います。こういう句を直ぐ季語につき過ぎとみるのは短絡的な評です。私はこういう日常吟、生活吟から季語の本意に近づくのが俳句の王道と思います。

曼珠沙華幼き別れそれっきり　　**清水俶子**
夕やけのかけらとなりてとんぼゆく　　〃
蝉とりの鳴き声抱きて帰りくる　　〃
水澄むや魚に遅れて影泳ぐ　　〃

飯田孝三さんの便りのコメント(10頁)があります。曼珠沙華の句、「上野駅別れ○○それっきり 」という句があるそうです。また、「**落蝉の滑台下りそれっきり**」(みち)の句も我々の句会でお目にかかった。幼き別れそれっきりの情感を曼珠沙華に語らせているのです。この点新しいといえば新しい視点です。私は、曼珠沙華の客観描写の左の句を模範にしています。

つきぬけて天上の紺曼珠沙華　　**誓子**
西国の畦曼珠沙華曼珠沙華　　**澄雄**

夕焼けのかけらの句は、とんぼに夕焼けの光を被せて、それを夕焼けのかけらと見立てたのですね。夕焼けととんぼの季重なりは気になりませんが、省略を効かせれば、全体をコンパクトにできそうです。説明調が冗長感を誘うとも言えましょうか。蝉とりの句、帰りくるが行くと比べるといいことが分かります。ジージーなく蝉の手を胸に抱いて帰ってくる子を温かく迎える母親の叙情でしょうか。これは、いい句と思います。

水澄むやの句、魚と影の因果関係を陳べてうまい。芝不器男に、左の句があります。

麦車馬におくれて動き出づ　　**不器男**

麦車の動き出す瞬間を捉えた力強い句であって、俶子さんの「魚に遅れて影泳ぐ」は水澄む水面をよく見た描

写であります。「水澄むや」の季語を含む上五に魚の動きを取合せた配合の句。いいと思います。

エッセイ

日本と台湾（四）

飯田孝三

『台湾万葉集』を読む

「台湾万葉集」という台湾の人達の短歌集がある。『昭和万葉集』の台湾版である。正続遺補合わせて百人の作品、約五千首が収録されている。作者の職業は、医師・教師・牧師・弁護士・社長・公務員・学生、主婦・バーのマダム・尼僧・生花師匠などいろいろだ殆どが旧日本領時代に日本の教育をうけ、戦後、中華民国政府治下の生活を身をもつて経験された方々である。収録作品を左に引く。

髪と爪残して征くと十八の日記に記せし学徒兵われ　黄　得龍

「沈まざる空母台湾」と皮肉りて筆跡調べにわが書き込みぬ　蔡　西川

応召し遠く離れし夫思ひ銃後の妻の吾隠れて泣きぬ　王　妹

統治者の日本の童ら威を張りて植民地の娘の悲しみを知らず　陳　秀喜

日の本に薬学びし君の若く睦ぶ縁しの夢の日長く　鄭　清治

東雲の巷を歩むつはものの武運長久を祈らむ　陳　崇豪

兵籍に縁のなかりし我に息子三人陸海空少尉　頼　天河

戦さなどなくば早稲田か慶應か一ッ橋など了へたる我か　洪　坤山

敗戦に参加し来しが逆転し戦勝国と聞かさるエフケンやシミキン恋し浅草は六区すたれてストリップ晒す　洪　坤山

同窓会「花も嵐も踏み越えて」来しと言ふ顔皆してゐる　呉　景美

殖民の日の面影は正座する我の姿勢に今も残れり　黄　得龍

兵の日は反日なれど短歌を詠む今は親日の我の不思議さ　黄　得龍

日本の恩師病みませば台湾の媽祖のお守り携へて発つ　黄　得龍

指名され声を張り上げ老い我が歌ふよ昔の「逢ひたさ見たさ」　李　東海

運命のいたづらなるか台湾に三代同堂母語同じからず　林　蘇綿

子も孫も日本語知らず特選に入りしわが短歌誰に残さむ　文　錫鏗

今頃は浴衣姿に盆踊り若し敗戦に遭ふことなくば　文　錫鏗

「イありがと」銭渡す吾に「イありがと」と運ちゃんも言ふとある小春　徐　奇壁

次は、この歌集の編者、孤蓬万里氏の作品。氏は旧制台北高校で、万葉学者大養　孝先生(昭和十七年から四年間、同校教授)の講義を聴き、以後、万葉ぶりの短歌づくりに努められた。台湾歌界の重鎮、医師、本名呉建堂(一九二六・四・一～一九九八・一二・一五)。

君は陸我は海へと憧れて君は戦死し吾は異国人

恩讐を越えて日台両国の衆が「仰げば尊し」歌ふ

国籍の三つに分かれ去る夜は如何で涙をせき止め得べき

日本人は台湾を捨てしと思はねど日本国確かに台湾を捨つ

一族にジャパニーズ、チャイニーズ、メリケンあり右翼左翼と論戦はす

八田技師の一服する像珊瑚潭に日台親善の歴史守るがに

日本が国連常任理事国にて台湾独立を推す夢を見き

すめらぎと曾つて崇めし老人の葬儀のテレビまぶたしめらす
一茶の句をふと思ひ出し蠅叩き振り上げし手を宙にとどむる
戦争に関はる人ら多く逝き残されし我ら史を重く負ふ
それぞれの人がそれぞれ幾つかの素顔を持ちて人間を生く
ただ一つ心に染まぬ事ありし寝やらぬままに万葉を読む

これら戦後の揺れつぐ世情の中で詠われた作品には、作者の真情が率直に吐露され、歌の背景や成立事情などが容易に納得される。また、万里氏の作品群には、戦後の詰屈な日本短歌を横目に、万葉ぶりの本流をゆく自負さえ窺える。通じて、詠いぶりに余裕あり、時に明るいユーモアを漂わす。このことは、台湾の俳句についてもいえる。**「平成の皇后陛下お夏痩せ」**(董昭輝)、**「光復節未だ日語の白髪かな」**(傅彩澄)。

ところで、右の作品群からは、日台関係の歴史や、戦後の台湾の歩みがつぶさに見てとれ、作者らが代弁する台湾の人達の心情が心に迫る。敗戦の途端に、「祖国」のため命を賭して共に戦った戦友と分けられ、あるいは住んでいた日本から立ち去りを余儀なくされ、あげく、台湾兵らは国籍を離れたため、戦友日本人並みの戦時の補償も受けられなくなった。識者の間には、日本が台湾に関して、真に反省しなければならないのは、戦前の植民地時代ではなく、戦後の台湾への姿勢にあるとする声がある。台湾の人は、インフラ等の公的資産の放棄はともかく、日本人が一代、二代かけて築いた財産を放棄し、殆ど着のみ着のままで帰るのを気の毒がり、終戦の混乱の中で送別会を開いて見送ったという。だから、台湾では残留孤児は一人も出なかった。先の大震災でも、台湾は真先に多額の支援金を送ってくれた。一方、戦後日本の台湾への対応は、種々な事情はあったにせよ、慙愧という外ない。とりわけ、今次震災時の日本政府の対応は非礼である。情けない。わが日本は、敗戦後七十年近く、徒に謝罪外交を繰り返すばかりで、言うべきをいわず、為すを怠り、台湾の旧同胞から武士道を説かれる仕儀である。『台湾万葉集』を読むにつけ、日台の縁し深さ、絆の強さが、いまさら身に染みる。『台湾万葉集』の作者は、万里氏始め多くの方々が既に鬼籍に入られた。両国民の意識も変わりつつあるだろう。だからこそ、日台の歴史の一端を実地に踏んだ我々には、日台の紐帯の謂れを確と次代に引き継ぐ責任がある。正しく「史を重く負ふ」のである。

南風や白毛殖やせる眉頭　　三泥

(H.24・5.30)

芭蕉のかるみ以後（21）

光成高志

寛文五年宗房二十二歳の十一月には、蝉吟主催の松永貞徳十三回忌追善百韻興行、その発句、脇、第三以下六吟までの一巡目は、

野は雪に枯るれど枯れぬ紫苑哉　　蝉吟
　鷹の餌こひと音をばなき跡　　季吟
飼狗のことく手馴れし年を経て　　正好
　兀げた張子も捨てぬわらはべ　　一笑
けふあるともてはやしけり雛迄　　一以
　月くるゝ迄汲むもゝの酒　　宗房

であった。蝉吟の発句は、紫苑に師恩を掛けて、まだ枯れぬ、離（か）れぬ先師の恩沢に浴しているという追善の気持ちをこめている。野原は一面に雪に埋もれ、冬枯れのさまであるが、紫苑は枯れずに残っていることだ。

季吟の脇句は、鷹が餌を欲しがって音をあげて鳴くのも、先師の亡き跡を偲んで泣く声に聞こえると、発句の雪に対して鷹野を付けたのである。正好は、飼犬のように年を経て手馴らしたものよと応じ、一笑が、長い間馴れ親しんだはげた古い張子でさえ捨てようとせず、可愛がる童と転じ、一以と宗房が三月三日の今日があるといって、雛祭の日まで雛人形を大切にしてきた句に、月の出る頃まで桃の酒を汲みかわすと雛の句で唱和している。師恩から流れるように、詞に付け、物に付けして句意が転じていく。このような付け方は貞門俳諧の特徴である。しかしながら、宗房には、既に自分の感動こそ真に表現すべきであると考えるようになる兆しが幾つかの付け句に現れている。

まどはれな 実（まこと） の道や恋の道　　正好
　なれで通えべば無性闇の夜　　宗房

仏道か恋の道かと迷うことなく、ひたすら後生を願うようにするがよいという句に対して、思い叶わぬと知りながら通うのはめちゃくちゃな闇夜の恋というべきだと付け、

秋によしのゝ山のとんせい　　一以
　有明の 罔岡（かげぼふし） のみ友として　　宗房

吉野山で秋の寂しさを囲っている遁世者に対して、有明月のもとで影法師のみを相手にしている人を付け、

早使ありと呼はる宿々に　　正好
　とけぬやうにと氷さゝぐる　　宗房

急ぎの使者が宿々で馬を乗り継いで行く様に、

主水司（もひとりのつかさ）に急いで氷を運ぶさまを付けたのがそれである。貞門にあっても、常に新味を工夫する宗房が既にあったのだ。

我孫子日記

10/19例会。10/21駒込。10/24松戸。10/25久寺家中。10/28アビスタ。10/31～11/3＊浜松、大阪、奈良。11/7SOA。11/9 2＊三井記念美術館。11/14SOA. 11/16例会。

＊ 日矢至る湖面の釣瓶落しかな　高志
　穴大師の穴に潜りぬ暮の秋　〃
　難波なり珈琲香る夜長かな　〃
　住吉の真鴨の澪の八の字に　〃
　鰐口鳴る右近橘鈴生りに　〃
2＊ 経箱は彰子納経と翁の忌　〃
　十一面観音拝す冬帽子　敏子
　南無薬師一切苦厄牡蠣食べよ　トシ子
　東海道に一歩踏み出す芭蕉の忌　敦子

訂正：九月号（19号）

子の遠く糸底洗ふ秋の水　**紀子**

鑑賞文の五行目「を」→「の」。

編集後記

今月は山田会てふ高校の国語を教えてもらった恩師との二泊三日の記録、それに正倉院展の感慨に浸って、本稿が少々遅れました。二十八日の銀座句会報は別紙に纏めることにします。エッセイ日本台湾は今月で終わります。芭蕉のかるみ以後の参考文献は、編集レイアウトの関係で省略していますが、いつか列記いたします。手紙俳句の鑑賞を新たに設けました。ハガキ俳句の一環です。貢一さん、俶子さんもしよろしければ、ハガキにて句をお寄せ下さい。

本誌創刊号の左の句が金子兜太さんの特選に入り、先の本行寺の大会にて、作者の目前にて短冊に自書されたものを頂いた。

胸に背に赤児を括り火を渡る　**宏之助**

以上は佐藤宏之助さんからの電話のあらましです。兜太さんは、今週の十二月二日近所の真栄寺での講演会に来られます。ニュースとしてここにお知らせしました。

白金葭　第21号　平成24年11月発行　　表紙の題字:嘉悦羊三。写真は白金葭
編集・発行人　光成高志(TEL&FAX　04―7187―1068)
発行所〒270－1119 我孫子市南新木2―14－17